第14回
【特別対談企画】

「継ぐ」のは親を認めること。困難は親子で考えれば打破できる

落語家 二代目 林家 木久蔵 氏

わが国の人口ピラミッドの最大のボリュームゾーンを戦後ベビーブーマー、いわゆる「団塊の世代」が形成しています。中小企業経営者にも当然、その世代の方が数多くいらっしゃり、今後、老境を迎えるにあたって直面するであろう、最大の懸案が「事業承継」です。

今回の特別対談企画では、2007（平成19）年9月、真打ち昇進を機に父親の名を襲名した落語家の林家木久蔵さんと対談させていただきました。初代が築いた「木久蔵」のブランドを長男である二代目がどのような心持ちで受け継いだのか。実業の世界と芸能の世界は一見、似て非なるものに見えますが、「事業承継」にあたって受け継ぐ側の不安と覚悟は同じです。

木久蔵さんの実体験に基づく率直な言葉の端々からは、のしかかるプレッシャーをはねのけるポジティブ思考と、父親側の承継を成功裏に導くための配慮や知恵が窺えます。"二代目"の金言の数々を、経営者の皆様には今後に向けた「事業承継」の参考にしていただければ幸いです。

子供の頃は親の仕事に関心なし

〈畠〉 今回は、これまでの特別対談とは趣を異にして、落語家の林家木久蔵師匠にお話を聞かせていただきます。実は、落語家さんがたくさんおられる中で木久蔵師匠に対談をお願いしたのには訳があります。

〈林家〉 さて、何でしょう。

〈畠〉 私どもは、中小企業及びその経営者を対象に、経営のアドバイスや税務のお手伝いをしているのですが、昨今は少子化の影響から、中小企業経営者に子供がいない、あるいは子供がいても親とは別の道に進んでいるなどの理由で、大切な事業の跡継ぎがいないというケースが増えてきています。

否応なく廃業せざるを得ない場合もあり、落語界でスムーズに「林家木久蔵」の名跡を父親である初代から受け継がれた師匠のお話が、中小企業経営者が懸案とする「事業承継」の何かしらのヒントになればと考え、ご無理をお願いした次第です。

〈林家〉 なるほど、かしこまりました。

〈畠〉 師匠は演劇を専攻されていた大学在学中、二十歳で落語の世界に飛び込まれました。父親が初代木久蔵の現・木久扇師匠で、傍目にはまさに落語家になるために生まれてきたようなご経歴です。この点、師匠ご自身はどのように考えられていますか。

〈林家〉 そうですね。子供の頃を振り返ると、父の商売にはほとんど、興味がありませんでした。今はだいぶ認知していただいていますが、僕の学生時代、若い人の関心はテレビに向けられていて、落語に興味を持つ人は皆無でした。高校生や大学生が、デートコースの一つとして寄席に行くなんてことはまったくなく、テレビの『笑点』を見て、あの大喜利が落語だと思っている人間が僕の周りにもいたくらいです。

僕自身は父の仕事ですから、落語がどういうものか、何となくは分かっていたものの、この時代に着物を着るなんてナンセンスだと思っていましたし（苦笑）、しかも座布団の上で正座までして、見てくれからして僕の興味の対象になりませんでした。

〈畠〉 では、師匠の若い頃は、今のようなワンコイン（五百円）落語はなかったんですか。

〈林家〉 ないですね。テレビに出ていない人をわざわざ見に行こうという雰囲気が、そもそもありませんでしたし、低料金で気軽に落語を楽しめるようになったのは比較的最近です。今でこそ落語を見に行くのは、面白いとか、ステータス性があるということで増えていますけど、当時の寄席には決まったお客様しか来ていなかったと思います。

〈畠〉 我々から見ると、落語には話術、小道具、しぐさの妙があって、本当に奥が深いなと思いますが。

〈林家〉 そう思われるのは、畠さんの世代の方々が、テレビの創成期から昭和四十年代にかけてよく放映されていた落語番組を見ていたからだと思います。月の家圓鏡師匠や三遊亭歌奴師匠、立川談志師匠など、司会に噺家（はなしか）も多かったですしね。

でも、畠さんのお子さんの世代は多分、落語というものをよく知らないはずです。テレビ専門のお笑いタレントがバラエティ番組などを埋め尽くし、落語家が入っていく余地はほとんどありません。

噺家になるなら二十歳までに

〈畠〉 お客さんの反応を見ながら、言い換えればお客さんとコミュニケーションしながら噺を繰り広げる芸の神髄を今の若い人にも知って欲しいものです。

〈林家〉 恥ずかしながら、僕自身も落語の奥深さを知るようになったのは、入門してからです。確かに身近に父はいましたが、家で駄洒落ばかり言っている父しか見ていなかったので、入門後はもう驚きの連続でした。

〈畠〉 師匠が「落語の世界に入りたい」と初代に伝えた時の反応はどうでしたか。

〈林家〉 父に直接、噺家になることについて談判したわけではなくて、母を挟んで、こちらの気持ちを伝え、父の考えや意向を、母を通して聞きました。「もし噺家の道を考えているのなら、二十歳までに入門しなさい」と。その明確な理由は今でもよく分からないのですが、二十歳を過ぎてからでは遅いという認識を父は持っていたようです。当時、僕は大学生でしたが、噺家になることしか考えていませんでしたので、「じゃあ、入る」と即決したのが入門のきっかけです。

〈畠〉 やっぱり、お父さんの影響が大きかったのでしょうね。

〈林家〉 そうですね。大学の志望校を決める際に、その先、社会人になってからの職業もイメージしますよね。そんな時に初めて考えを巡らせたのが、自分の環境なんです。

噺家は今、全国に八百人いると言われています。昔と比べればかなり多くなっているらしいのですが、日本の人口一億二千万人の中で、落語家になれる確率は非常に小さい。一方、自分は落語家の家に生まれている。すると、星の数ほどいろんな商売、職業がある中で、希少で特殊な落語の世界に身を置いてみたくなったんです。

〈畠〉 仏教的な表現を借りれば「縁」なんでしょうね。

〈林家〉 あまたの命が生々流転する輪廻転生の中で、噺家の息子に生まれたのは今世だけ。さらに、今世において一番、楽しめたりいろいろ感じたりすることができる商売は何かなと考えたら、やっぱり噺家だったんです。

〈畠〉 そういう考え方ができるのは、素晴らしいですね。

ところで、中小企業の経営者の子息がその会社の後を継ぐ場合、倒産の業種や関連する企業で先に修行させるケースが多いのですが、師匠の場合はお父さんのところにすぐ入られています。ほかで勉強して、それから父親に入門するという考えはなかったのですか。

〈林家〉 僕がこの世界に入る上で、父がプライベートな立場で付けてきた唯一の条件は、大学を卒業することでした。で、今、申し上げたように落語家になるには二十歳までに入門した方がいいとの助言もありました。

でも、落語家に入門すると、最初の四年間は修行期間といわれることで、二十四時間、師匠のために体を空けておく必要があります。そうすると、大学卒業という父の最低条件をクリアすることは不可能なんです。他の師匠に入門しようとすれば大学を辞めなければならなくなるので、これらの条件の兼ね合いから、大学に通う時間を持たせてくれるであろう父に入門することにしました。『笑点』にレギュラーで出られるくらい、父が落語の世界で成功している人だというのも分かっていましたしね。

画期的だった名跡の「生前贈与」

〈畠〉 父親が経営者、息子さんが社員として同じ会社にいる場合、他の社員なら我慢できることを息子さんが我慢できない、逆に社員が我慢できないことを息子さんは我慢できるということが少なからずあります。先代に入門後、現在までにそうした経験はございませんか。

〈林家〉 落語は江戸時代から続くだけあって、親がトップに立つ一門に入門しても、そうした齟齬（そご）を生じさせない仕組みが整えられています。

修行期間、つまり前座さんの四年間は、寄席の運営を落語界の中で一番にエラルヒーの低い前座さんがやることになっていまして、そうすると、他の師匠方の前座さんたちと一致団結して寄席の中のことをやらなければいけない。楽屋番は、他の師匠のお世話もしますし、確かに僕は父の弟子ではあるけれども、いろんな師匠から物事を教わるシステムになっているんです。

自分の師匠から「ちょっと付いてこい」と言われない限り、放し飼い状態で勉強をするので、みんなが師匠と言えますね。落語界という小さな村があって、村の大人たちに子供たちがいろいろ教わる感じです。

〈畠〉 経済団体や商工団体を彷彿させますね。

〈林家〉 この世界に入って分かったのは、うちの父が落語界ではかなり立場が上の人だということと、人の好き嫌いがはっきりしている人が多い中で、父が他の師匠方から「木久ちゃん、木久ちゃん」と呼ばれ、大変好かれる人物であるということでした。

ああいうキャラだけど、特に人間関係の面できめ細かな努力をしてきているんだなと知り、父に対する見方が変わると同時に、その存在の大きさを知りました。

〈畠〉 素直に父親に対する認識を改められているのはすごいです。では、師匠が二〇〇七（平成十九）年に真打ちになられた時に、初代からどんな言葉をかけられましたか。

〈林家〉 言葉というより、もっとスケールの違うことを父は用意してくれました。真打ちになる際、「木久蔵」の名を僕に譲ってくれて、二代目を襲名したのですが、実は長い落語の歴史の中で、画期的なことでした。

〈畠〉 歌舞伎などでは、ごく普通にあることのように思いますが。

〈林家〉 落語界では、名跡の「生前贈与」はないんです。少なくとも死去した先代の喪があけてから襲名するのが最速です。父が生前に名前を譲る。これが尋常でないことは、僕も分かっていたので、息子とはいえ、父が一代で築いた名前をもらっちゃまずいんじゃないかと、正直、悩みました。

しかし、「売れるためにはそこまでしなきゃ駄目だ」と本人から諭されましたし、父自身も新しい名前を一般公募して、本当に大変なことになったぞと率直に思いました。

失敗したら落語のおちにすればいい

〈畠〉 私が思うに、生前に後継を指名したのは、先代の哲学だったのではないかと思います。

〈林家〉 父とすれば、「木久蔵」を隠居名にせずに済みますし、僕だけでなく自身の改名によって落語家としてのステップアップを印象づける狙いがあったのかもしれません。リスキーな決断ではありましたが、ダブル襲名をうたった公演では、『笑点』メンバーをはじめ、売れっ子の噺家さんたちも助けてくれて、多くのファンに「木久扇」「木久蔵」の名が定着したと思います。

〈畠〉 お父さんの人徳ですね。でも、師匠ご自身にも相当なプレッシャーがありましたよね。

〈林家〉 ええ。でも、「人は成功談でなく、失敗談を求めているから、"下げ"（※落語のおち）が付いてもいいんだよ」と父に言ってもらえて、すごく楽になりました。あれは、本当に感謝しています。

〈畠〉 中小企業でも、当代から子息に社長業が引き継がれる場合、周りがどう盛り立てるか、支援するかが重要なファクターになります。実際に襲名してからはどうでしょう。人気商売という側面もあり、我々のような世間以上の難しさや厳しさが、落語家さんにはあると思うのですが。

〈林家〉 いや、企業経営者の方が大変でしょう。僕らは、売れなくても自己責任で終わります。一方、経営者の方は、社員さんやその家族の方など背負うものが大きい。僕らとは違うところで神経を随分、遣われていると思いますよ。

落語家は知識や情報を頭に仕入れるばかりで、在庫もなければ原価もない。自分の体を会場に持って行ってお噺をするだけ。百人、二百人、千人という人の前で芸を披露する特異さは確かにありますが、そうした日々の経験の積み重ねで芸を磨く僕らのような商売の方が、やっぱり気が楽でしょう。

〈畠〉 金言ですね。ありがとうございます。ところで少々話が変わりますが、師匠が落語家になっていなかったら、どんな仕事に就かれていたと思いますか。

〈林家〉 そうですね。もし、何か家業を持っている家に生まれたのなら、親がしている仕事をやはり継いでいると思います。何故かというと、親に育ててもらった恩もありますし、「継ぐ」という行為が親を認めることにつながるからです。

経験は無駄にはならない

〈畠〉 確かイギリスの諺（ことわざ）だったと思うのですが、「学問なき経験は、経験なき学問に勝る」という言葉があります。要は、経験に勝るものはないということですが、師匠ご自身の経験をもとに、「二代目」はこういうところに気をつけなさいと、アドバイスしていただけるようなことはございませんか。

〈林家〉 「人生は楽しいな」と思って生きることが、一番健全だと自分では感じていますし、多くの人にとってそのツールの一つが落語だと思っています。

〈畠〉 なるほど。師匠の今後の夢についてお聞かせください。

〈林家〉 「人生は楽しいな」と思って生きることこそが、一番幸せなことですね。

自分自身のスペシャル感を世の中に訴求し、認知してもらうには、受け継ぐということが一番、効果的ですし、自分から次の世代につないでいく上での大きな付加価値にもなると思っています。

繰り返しになりますが、「せっかくこの環境に生まれたのだから、それを楽しまないと」という気持ちもそこに加わります。

金沢は住む人が楽しんでいる街

〈畠〉 師匠が、落語家としてのステップアップを印象づける狙いがあったのかもしれません。リスキーな決断ではありましたが、ダブル襲名をうたった公演では、『笑点』メンバーをはじめ、売れっ子の噺家さんたちも助けてくれて、多くのファンに「木久扇」「木久蔵」の名が定着したと思います。

〈畠〉 お父さんの人徳ですね。でも、師匠ご自身にも相当なプレッシャーがありましたよね。

〈林家〉 ええ。でも、「人は成功談でなく、失敗談を求めているから、"下げ"（※落語のおち）が付いてもいいんだよ」と父に言ってもらえて、すごく楽になりました。あれは、本当に感謝しています。

〈畠〉 中小企業でも、当代から子息に社長業が引き継がれる場合、周りがどう盛り立てるか、支援するかが重要なファクターになります。実際に襲名してからはどうでしょう。人気商売という側面もあり、我々のような世間以上の難しさや厳しさが、落語家さんにはあると思うのですが。

〈林家〉 いや、企業経営者の方が大変でしょう。僕らは、売れなくても自己責任で終わります。一方、経営者の方は、社員さんやその家族の方など背負うものが大きい。僕らとは違うところで神経を随分、遣われていると思いますよ。

落語家は知識や情報を頭に仕入れるばかりで、在庫もなければ原価もない。自分の体を会場に持って行ってお噺をするだけ。百人、二百人、千人という人の前で芸を披露する特異さは確かにありますが、そうした日々の経験の積み重ねで芸を磨く僕らのような商売の方が、やっぱり気が楽でしょう。

〈畠〉 金言ですね。ありがとうございます。ところで少々話が変わりますが、師匠が落語家になっていなかったら、どんな仕事に就かれていたと思いますか。

〈林家〉 そうですね。もし、何か家業を持っている家に生まれたのなら、親がしている仕事をやはり継いでいると思います。何故かというと、親に育ててもらった恩もありますし、「継ぐ」という行為が親を認めることにつながるからです。

〈畠〉 なるほど。師匠の今後の夢についてお聞かせください。

〈林家〉 「人生は楽しいな」と思って生きることこそが、一番幸せなことですね。

自分自身のスペシャル感を世の中に訴求し、認知してもらうには、受け継ぐということが一番、効果的ですし、自分から次の世代につないでいく上での大きな付加価値にもなると思っています。

繰り返しになりますが、「せっかくこの環境に生まれたのだから、それを楽しまないと」という気持ちもそこに加わります。

〈畠〉 責任感からですか？

〈林家〉 それもちょっと違います。

周りがどう盛り立てるか、支援するかが重要なファクターになります。実際に襲名してからはどうでしょう。人気商売という側面もあり、我々のような世間以上の難しさや厳しさが、落語家さんにはあると思うのですが。

〈林家〉 いや、企業経営者の方が大変でしょう。僕らは、売れなくても自己責任で終わります。一方、経営者の方は、社員さんやその家族の方など背負うものが大きい。僕らとは違うところで神経を随分、遣われていると思いますよ。

落語家は知識や情報を頭に仕入れるばかりで、在庫もなければ原価もない。自分の体を会場に持って行ってお噺をするだけ。百人、二百人、千人という人の前で芸を披露する特異さは確かにありますが、そうした日々の経験の積み重ねで芸を磨く僕らのような商売の方が、やっぱり気が楽でしょう。

〈畠〉 金言ですね。ありがとうございます。ところで少々話が変わりますが、師匠が落語家になっていなかったら、どんな仕事に就かれていたと思いますか。

〈林家〉 そうですね。もし、何か家業を持っている家に生まれたのなら、親がしている仕事をやはり継いでいると思います。何故かというと、親に育ててもらった恩もありますし、「継ぐ」という行為が親を認めることにつながるからです。

〈畠〉 なるほど。師匠の今後の夢についてお聞かせください。

〈林家〉 「人生は楽しいな」と思って生きることこそが、一番幸せなことですね。

自分自身のスペシャル感を世の中に訴求し、認知してもらうには、受け継ぐということが一番、効果的ですし、自分から次の世代につないでいく上での大きな付加価値にもなると思っています。

繰り返しになりますが、「せっかくこの環境に生まれたのだから、それを楽しまないと」という気持ちもそこに加わります。

〈畠〉 責任感からですか？

〈林家〉 それもちょっと違います。

落語家
林家 木久蔵 氏

畠経営グループ 代表
畠 善昭

【Profile】 林家 木久蔵 氏　落語家

1975（昭和50）年9月29日生まれ、東京都出身。玉川大学文学部芸術学科演劇専攻卒。本名：豊田宏寿。
落語家を志し、大学在学中の1995（平成7）年10月、父親である初代林家木久蔵（現・木久扇）に入門。翌年2月に前座入りし、芸名を林家きくおとする。1999（平成11）年9月に二ツ目昇進。翌年出演した日本テレビ『笑点』の若手大喜利でMVPを獲得。
2007（平成19）年9月、真打ちに昇進。落語界史上初となる「ダブル親子襲名」を行い、二代目林家木久蔵に。以降、親子でCM、テレビ番組に出演する機会も増え、共著も発行。
現在は古典落語を中心に演じるほか、「木久蔵流、コミュニケーション術」「木久蔵流・笑うが一番」などの演題で講演会活動も行っている。